絶望のカブト

（＾—＾）

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、青年はＩＳを動かし１人目の男性操縦者となった。
社会から追われ逃げていた時、何者かに捕まった。
そして、青年は実験台とされ様々な事をされ、苦痛の日々を送っていた…
そんなある日、彼の目の前に１人の男と一匹のダークカブトゼクターが現れた。
そして、男は青年にダークカブトゼクターを託した。

ここから始まる、青年の物語。

目次

プロローグ
1人目の男性操縦者現る ―― 1
第1章
1話 実験そして変身 ―― 9
2話 ダークカブトの初陣 ―― 20
3話 入学？ ―― 34

プロローグ
1人目の男性操縦者現る

僕は、天藤　相司。１４歳だ。僕には家族がいない。物心ついたときには既にいなくなっていた。
そして、１人で生活している。親が残してくれた大金でギリギリの生活を送っている。

学校が終わり、買い物に行く途中にあるものが目にとまった…
この世界を変えたＩＳだった。ガラスの向こうに展示させられている。
もちろん、量産機と呼ばれるものだ。そして、僕は近づきガラスに触れた……
その時!!
急に僕の体が光だした。周りにいた人達も驚き、光が眩し過ぎるのか、腕で顔を隠している。

「何、なにが起こったの?」

「お母さん、眩しいよぉ」
「な、なんだ！」
「「「「「「「「!?」」」」」」」」
周りは唖然としていた。目の前で起きる筈がない事が起こったのだ……
目の前に現れたのは、ＩＳを纏った青年。天藤相司だった
「な、なんで僕がＩＳを!?」
ＩＳとは普通、女性にしか反応しない仕組みなのだ。
これには周りの人も驚き、写真や動画を撮っている人もいる。
僕は何がどうなっているか、思考が混乱し呆然としている。
すると、しばらくたったのか僕の周りにはＩＳを纏っている人達がいる
「君がＩＳを動かした青年ね。こちらに来てもらえるかしら?」

1人の女性が呟き、銃をこちらに向けた。
僕は混乱してて冷静になれなかったため銃を向けられた瞬間、心が恐怖に染まり僕の心が体に訴えてくる

「(殺される、殺される、殺される、殺される)」
「うっ‥‥ うわあああああああああ!!!」

僕は恐怖で叫び、逃げるため上空に飛び、逃げた。

「あっ!? 待ちなさい!私達はあなたを保護する為にきたの! あなた達、追うわよ!」

僕はひたすら逃げ続け、なんとかまいた。
僕は冷静になりながら、今の状況を考えた。

「(僕がＩＳを動かしたせいで僕は追われる身になっているのか、ならひたすら逃げるし

か……）」

僕はしばらくの間、空を飛んでいた。空から見る夜の街は絶景だった。

～翌日～

僕は街に来ていた。フードを被り、顔を見られないようにし、都会を歩いていた。都会なので

建物に大きいテレビがついていた。そのテレビの内容は…

「先日、1人の青年がISを動かしました。年齢は14~16歳。未だに見つかっておりません。
青年は今も、ISを纏って逃走中だと思われます。青年はISを纏っていることから指名手配犯として
捜索され続けています。もし見つけた場合、速やかに警察を呼んで下さい。繰り返します、先日…」

やっぱり、追われる身か…　人気者は大変だな
と、呑気な事を考えていると…

「痛っ!?」
「痛ってぇー!…　おい!ちゃんと前見ろ……　!?お前は!」

いててて…　何を驚いてるんだ?…　ハッ!?
僕は顔を隠していたフードが無いことに気づきハッとなる。

「お前は男性操縦者！」

しまった！……　バレたと思った時にはもう遅かった。

「本当だ！男性操縦者がいたぞー!!」
「警察よ！警察を呼んで!!」
「捕まえるぞー！」

ヤバい！逃げなきゃ！
僕は街を走り、逃げた。

逃げている途中に路地へと繋がる道を見つけた。

「（そうだ、あそこに逃げよう！）」

そして、僕は裏の路地へと逃げた。

「ふぅ～ここならしばらくは隠れられるかな？」

僕は路地にはいり、時が経つのを待っていた。

しばらく経ち、僕は何かの気配に気付いた。

「ここに、いたか」

低い声・・・恐らく男性だろう。

「誰だ！何処にいる!!」

すると、後ろに気配があると気づき後ろを向くと

「そこか！・・・・・・・・・・・・!!?」

後ろを向いた瞬間、急に意識が遠のいていく…

「…　なに…　もの…　だ…　？」

その言葉を最後に青年の意識が飛んだ。

青年が最後に見たものは……

白い何者かだった……

第1章
1話　実験そして変身

「う……ん？……ここは一体、何処だ？」

確か僕は、裏路地で何者かによって意識を刈り取られたのか……

「一体、誰だったんだ？……アイツは？」
「お目覚めの時間か～。ようやく目を覚ましたみたいだね。」
「その声は!?……」

僕は路地で聞いた、あの声がする方を向いた。

「お前が…　あの時の！」

声がした方を見ると、白衣を着て口にマスクを着けている集団だった。

「誰だ?!……　お前達は?」
「名前はまだ決めてない、ただのマッドサイエンティストの集団さ。」
「なんだと?俺をどうする気だ!そして、ここから出せ!」

天藤相司は今、厳重な牢屋に閉じ込められている。

「君を此処から出す気は一切ない。」
「なんだと!?」
「何故なら、君には我々の実験台となってもらう!アァーハハハハッ」

狂ってる…　コイツら全員狂ってる…

「そして!実験が全てを終わり次第君には我々の兵器となってもおう!…　運べ」

ガラッ

厳重な牢屋の扉が開き僕は、白衣を着た者達に連れられる。

「やめろッ！離せッ！」

「後、此処からは逃げられない決してな。ヒャーハハハハッ!!」

「…… そ、そんな」

僕は事実を突き付けられた。薄々は気付いてたのかもしれない。

此処からは逃げられない…… と

「さぁ！最初の実験だ！ヒャーハハハハッ！」

僕は実験室と思われる場所まで運ばれた。

「やめてくれッ！離してくれッ！」

僕は必死に抵抗するが白衣を着た者達に力で負ける

そして、実験室に入り実験台と思われる台に乗せられる。

「離せッ！此処から出せッ！」
「さぁ大人しくしててくれよ？実験の邪魔になるからな？」

1人が注射のような物を持ち、言った。
そしてもう1人がメスを持ち、こう言った…

「始めよう、我々初の実験を!!」
「やめろ…　やめろおおおおおおおおッ!!」

グサッ

肉に何かが刺さる音がし彼は叫んだ

「うわあああああああああああああッ!!!」
「アーハハハハハハハハハハッ!!!!」

そして何時間も実験が続いた……

～約1年後～

彼、天藤相司はあれからも次々と酷い残酷極まりない実験をされ続けた。
最初の一週間はまだ反抗していたが次第に反抗出来なくなり、一週間経った後には反抗出来なくなってしまっていた。いや出来なかったのだ。
実験の内容とは主に人体実験、肉体を使った実験だった。唯一気になった実験は何故か白衣を着た者達は自分が作った無人機と俺を戦わせた。つまり、戦闘実験だ。
そして、日に日に〝俺〟は強くなっていった。〝俺〟は苦痛の日々を送っていた。
そんなある日、ある出来事が起こった・・・

「次の実験は、3時間後だ。寝とけよ」
「・・・・・・・・・」

バタンッ

厳重な牢屋の扉が閉まり、牢屋の中が静寂に包みこまれる。

ピカーン

そして俺が寝ようとした時、目の前が光る。

「……な……何……だ……」

ブーーーーーーンッ

何かが飛んで来て、目の前に現れたのはメタリックな黒いカブトムシ?だった…

「……な…何だ……コイツは?」

「やあ、君。」

男の声がしたので声がした方を見ると、謎の男が立っていた……

「……誰だ?……お前…」

「僕は、天道総司だ。……偽者だけどね」ボソッ

「…　天道総司…　俺と…　一緒…　の…　名前？」
「そう！漢字は少し違うけど同じ名前さ。」

男は天道総司と名乗っており、服装は少しボロボロだ

「時間が無いから短めに話すよ？突然だけど君にはこの世界を変えて欲しい。」
「……　は？」
「まあ、その反応が普通だよね。事情を説明すると、この世界はＩＳが登場した事により女尊男卑の世界になってしまった。このままいくと人類は自らの手で全てを壊してしまう。だから君に止めて欲しいんだ。……　その腰に巻いてるベルトとこの、ダークカブトゼクターで。」
「…　腰に…　ベルト？…　何を…　言ってる？……　!!？」

俺は驚いている。さっきまで腰にベルトなんか巻いていなかったのに
何故か巻かれていた。

「そして、このダークカブトゼクターが今日から君の相棒さ」

「……相……棒……」
「……それにしても……どうやって……此処に？」
「僕は死んだんだ。そして新たなダークカブトゼクターの資格者を探すため、時を超え、時空を超え、世界を超え此処に来たんだ」
「……なる……ほど」

シュ～～～～～～

「おっと、もう時間だ。」
「……天藤相司、この世界はきみに頼んだよ」

そう言い彼、天道総司と名乗る男は風のように消えた……

「……俺が……世界……を……変える……」

俺はそう呟き、ダークカブトゼクターを右手で掴んだ

ガシッ

「世界を変える……　俺がこの世界を……」

そして俺はダークカブトゼクターを見た。
ダークカブトゼクターはそれに答える様に少し光った。

「……」

俺は無言のまま、ダークカブトゼクターをベルトの近くに持っていきこう言った…

「……　変身」

俺は「変身」と言い、同時にダークカブトゼクターをベルトにセットした

［ＨＥＮＳＨＩＮ］

と、ダークカブトゼクターから機械音声が鳴り、俺の体を幾つもの六角形が展開し俺の体を装甲で覆った

そして、現れたのは、上半身が装甲で下半身がとてもスマートに包まれた天藤相司だった。

色は全体的にシルバーで所々に赤がはいっており、目は黄色の複眼だった。

「…　俺が……　変える…」

そう呟き、装甲を纏った天藤相司は厳重にされてたはずの牢屋を出た……

2話　ダークカブトの初陣

～???side～

「一人目の男性操縦者の居場所は本当にここか？」
「はい。間違いありません」
「必ずここにいると思われます。」
「しかし、こんな廃墟の街にいるとはな・・・」
「一年前、急に姿を消しましたからね・・・」

一年前、一人目の男性操縦者が急に行方不明になった事は全世界の人達が知っている。
そして今、大きな車に3人の女性が乗っていた。
向かっているのは、一人目の男性操縦者がいると思われる場所。
目的は男性操縦者の保護だった

プルルルルルー

「〝束〟からか……」
「もすもすひねもす～束さんだよ～」
「切るぞ…」
「待って待ってよぉ～〝ちーちゃん〟。男性操縦者の居場所が分かったよ～」
「本当か！…で、何処にいる？」
「街の奥にある研究所だよ。多分、一年の間ずっと実験台にされたんじゃないかな～？」
「なん…だと？」
「そ、そんな…」
「…酷すぎるわ」

車に乗っている三人の女性は絶句していた。
何故なら、中学生を捕まえ実験台にしたのだから…

「スピードを上げろ！今すぐにでも救出しに行くぞ！」
「はっはい！」

「絶対、助けだしましょう！」
「ああ、〝麻耶〟。〝更識姉〟。」
「「はい！〝織斑〟先生！」」

～side out～

～天藤相司side～

その頃、研究所内では・・・・

「やめろ・・・　やめてくれえええええぇぇぇ」
「イヤだ・・・　死んでたまるかアアアァァァ!!」
「我々の研究がああああ」

装甲を纏った天藤相司はクナイガンを乱射し研究所を荒らしていた・・・

～ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～織斑・更識・山田ｓｉｄｅ～

「た、大変だよ！ちーちゃん！」
「どうした！束！」
「け、研究所が燃えてる！」
「なんだと!!」
「間に合わなかったんですか…」
「ウソ…　そんな…」
「男性操縦者は生きてるのか!?」
「分からない！カメラをハッキングしようとしても、全て壊れてるからできない！
　だからちーちゃん達が行って確かめて！」
「ああ、分かった。」
「「（頼む、生きてて…）」」

～5分後～

「ここが研究所ですね…」
「ああ、そうだな…」

目の前に映るのは、赤く燃えている大きな研究所だった…

「やはり、彼は……」
「諦めるな、更識姉。」

「はい……」
「とりあえず中に入ろう」
「織斑先生！」
「なんだ？麻耶」
「入り口の方を見てください！何かが来ます！」
「なに!?二人ともＩＳを展開しろ！」
「「はい！」」

そして三人はＩＳを展開し、入り口から来る何者かに警戒していた。

「来ます！」

真耶の一言により、入り口に視線を向けると…

「なんだ……　あれは!?」
「…　あんなの……　見たことないですよ…」

入り口にいたのは装甲を纏い目が黄色の複眼をした謎の者だった

「もしかして男性操縦者!?」

「なに？」

更識姉の発言で三人は警戒を緩めた・・・　その時!!

バンッ　バンッ　バンッ

突如、銃声が鳴りこちらに三発撃たれた。千冬は反応出来たが他の二人は警戒を緩めたため、あたってしまう。

「「きゃあああ」」

「ぐっ!?」

「大丈夫か!?二人共？」

「はい、ですが急所に当たってＳＥが余り残ってません・・・」

「私もほぼ、残っていません・・・」

「そうか…」

千冬は怒りと嬉しさが沸き上がってきたのだ…

千冬は装甲を纏った何者かにこう言った

「私の後輩を攻撃したのは、許せんが同時に嬉しさがあるぞ」

「……」

「貴様の射撃の腕、実に見事だった。ＩＳの急所を知ってて当てられるのは私と真耶位だからな」

「そして、１つ質問する。貴様は男性操縦者か?」

「……」

「貴様が男性操縦者か、分からない今は少々力ずくで聞き出すぞ?」

「……」

「答えないというなら肯定とみるぞ!」

千冬は剣をもち、突っ込んでいく。

だが、装甲を纏った者は銃を斧にかえ千冬の初手を受け止める

「ほう…　私の初手を受け止めるか。その銃は斧にもなるのか。便利な物だ。」
「……」
「そして貴様、中々やるな？久し振りに同等に戦えそうな相手がいて私は嬉しいぞ！」

何時も真面目な顔している千冬はこの時だけは嬉しさの余り、笑顔だった

「次…　いくぞ!!」
「……」

そして千冬はどんどん素早く剣を振るうが、装甲を纏った者は余裕のようにかわしたり時々受け止めている
そう遊んでいるのだ。

「貴様、遊んでいるな？」
「……」

装甲を纏った者は未だに、喋らない

「なら、本気でいかせてもらう！」

そう言い千冬は容赦ない斬撃を出すが、それを簡単によけていく装甲を纏った者の人外同士の戦いを見て、

二人は呆然とする。

「山田先生、あの人達は人間なんですか？」

「わ、分かりませんよぉ」

そんな二人の言葉を無視するかのように人外の戦いは続いていた・・・

「ふっ。こんなに面白い戦いは久々だぞ！」

そう言うと、装甲を纏った者が突然ふらつき始めたのだ

「……」フラフラ
「どうした？」

ドサッ

装甲を纏った者が倒れ、同時に変身が解除される
何故、彼が倒れたかというと、彼はまともな食事をしていなかったため、貧血を起こし倒れてしまったのだ

「おい！大丈夫か？……男性操縦者!?」

変身が解除された者の顔を見て、千冬は驚いていた。

「おい！二人共！今すぐ学園に戻るぞ！」
「は、はい！」
「わ、わかりました！」

そして、男性操縦者を含め四人は車へと乗り、学園へと帰って行った

～ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～???ｓｉｄｅ～

これを持って逃げたかいがあったな。アーハハハハッ!!!

とうとう完成するぞ!!最強のＩＳがあああああ!!

男が言った、最強のＩＳの名は……

「〝カッシス〟」

3話　入学?

「ん…　ここは…　?」

天藤相司が起きると、知らない天井だった。

「やっと起きたか?」

声がし、そちらを見るとそこには腕を組んだ千冬がいた

「俺を…　実験台に…　する…　のか?」
「いや、私達ははお前を保護するためにここに連れてきた。」
「そ…　うか」
「天藤。お前今まで研究所で何をさせられていた?」
「聞いて…　も後悔…　するなよ」
「ああ。」

そして、天藤は研究所であった、一年間に起きた出来事を話した。肉体実験など様々な事をありのままに話した
話が終わり千冬の顔を天藤が見ると千冬の顔は青くなっていた。

「そうか…　辛かったな…」
「……」
「ここは、一応学園だ。明明後日からは登校してもらうがいいか?」
「ああ…　分かった」
「後、明日は私の弟が試合に出るんだ。よかったら、見に行っても構わん」

そう明日はセシリア対一夏との試合だった

「そうか…　暇だったら…　行く」
「分かった。だが無茶はするなよ。」
「それじゃあ私は会議なんでな。安静にしておけよ。」
「…　ああ」

そして、千冬は保健室の扉を開け、出て行った。

「……」

天藤は何も喋らず、ただただ空を見ていた……

～翌日～

「…　見に……　行くか」

～観客席の端～

天藤は端で試合を見ていたが…

「なんだ…　この試合は……」

「……　つまらん」

そう呟くと観客席から離れた。

そして、アリーナでは自爆し敗北した一夏の姿があった。

～保健室～

「どうだった?試合は」
「……　つまらなかった」
「そうか…　私も正直に言うとつまらなかったな」
「……　そうか」
「それより、体調はどうだ?」
「……　大丈夫だ」
「そうか。明後日からは登校してもうからな。ゆっくりしておけ」

「……分かった」
「そして、1つ聞きたい。あの銀のベルトはなんだ?」
「…それは…言えない」
「…俺は…変えなくちゃ…いけない」
「何を変えるんだ?お前は」
「…それも…言えない」
「…そうか。だが何かあれば私に言えよ?」
「ああ…何かあったら…な」

バタンッ

そして、千冬は出て行った。
天藤はカバンの中にある銀のベルトを出そうとしたときそこには、

「…なんだ…これは?」

カバンの中にはもう1つの少し形が違う銀のベルトが入っていた。

すると急に眠気が天藤を襲った。

「うっ…　なんなんだ」

ドサッ

そして、天藤は倒れた

「…　うっ…　ここは」

起きて周りを見ると、何もない真っ暗な空間だった。

「やぁ、また会えたね。」
「…　お前は…　天道総司!?」
「…　ここは…　どこだ?」
「ここは君の心の中だよ」
「時間が余りないから、言うよ。君には二重人格になってもらうよ。
そして、2つのゼクターを使ってもらう」
「…　は?……　どういう事だ」

シューーーーー

「あ、もう時間だ。詳しいことは自分で分かるから。じゃあね」
「…　あっ…　おい待て!」

「また、言うけどこの世界を頼んだよ…　天藤相司」

そう言い、天道総司は風のように消えた。

「…　どういう事なんだ…　一体」

ドクッ　ドクッ　ドクッ

「うっ!…　なんだ!…　心の奥から…　ドス黒い何かが…　沸き上がって…　!?」

ドクッドクッドクッドクッドクッドクッドクッドクッ

「…　まるで…　地獄のような黒い…　何かが…　来る!」

ドクッドクッドクッドクッドクッドクッドクッドクッ

「うわあああああああああああああ」

バサッ

そして、天藤?がベッドから起き上がり呟いた。

「どうせ…　俺なんか…」

そう呟くと、天藤はもう1つのベルトを取り、外に出た…

その頃、ＩＳ学園の校門では・・・

「待ってなさいよ！一夏！」

１人のツインテールの少女がいた。